遠く旧い昔から皆が眺めつづけてきた姿そのままの姿である。それはお城山を中心に造り上げられた、佐伯だけがもつ、十ばらしく美しい絵巻物さながらである。

ふと足許に近く、いろいろと変った新しい佐伯のあるのに気がつく。佐伯も立派な所になった。それも良い。当り前のことである。日本中が急激に成長し、激しく変貌していくなかで、佐伯だけが昔のままの姿で残っていてほしいなどとは決して願わない。

唯その中で、佐伯しかないものだけは、何とか大切にいつまでも残して置くことを考えて貰いたいと思うのである。

岡本田独歩も、

佐伯の春　先づ城山に来たり
佐伯の夏　先づ城山に来たる
秋また　はやく城山に来たり
冬はうそ寒き風の音
先づ城山の林に聞くなり

城山寂たるとき　佐伯寂たり
城山鳴るとき　佐伯鳴る
佐伯は城山のまの女房なり

と詠び、

「子が初めて佐伯に入るや、まずこの山に心動き、幸すでに佐伯を去るも最後その景色を忘れ去るあたわず、この山なくば余には殆んど佐伯なきなり」

とまでいっている。僅か一年足らずの出会いであり乍ら、お城山は独歩をしてこう言わせているのである。佐伯に育つものが心の奥はどうあるべきかを、至極当り前のことといって良いのではあるまいか。

どうか、この「お城山」だけは、いつまでも佐伯人の魂として、昔のままの変わらぬ姿で残して置いて欲しい、と切に願うものである。

（東京　佐伯在郷御友会員
佐伯市出身・賛助会員）

記録

お頭様参拝記

佐伯史談会
会長　髙木嘉吉

去る一月二十五日に、宮崎県東臼杵郡北川町浜口の共人クラブの方々に招待されて、お頭様明神の例祭に参列した。相葉幹事と、休石会員と私の三人が、前からの連なりもあり、案内されたのであるが、佐伯史談会の代表として来賓扱いにされて、いささか面食ったわけである。

市棚駅で下車して瀬口に向ったが、冬枯れて淋しい風物も、曽遊の地として懐しく、お頭様は温かく一行を迎えた。小野茂会長、須藤清助副会長等、旧知の方や其の他男女の会員が、いそいそと立ち働いて準備を進めているのは、頼もしいことであった。

定刻、延岡の浄満寺の住職の読経で式がはじまった。大永年間（一五二〇年代）よりもっと前から、此の地には「室泉寺」があり、代々盲僧が住持として寺を守り、琵琶を弾いて地神経（じじんぎょう）を誦じ、仏を祀ると共に民家をまわって市施を受けていた。

大永七年（一五二七年）七月二十五日（室泉寺系図）、長高智の筆で拙年礼城十代の城主佐伯惟治は悲惨な最期を遂げたが、後者

の一人が「主君の頭を敵に渡してはならぬ」と、その頭をとって囲みを破り、山中を潜行して瀬口にたどりつき、宝泉寺の前にたたずんだ時、持ち来った頭が急に重くなって動かせなくなった。そこで住持の盲僧に其の由を告げると、住持はねんごろに読経の後、これを同地に葬った。

傳え聞いた里人は、香華を手向けて悲運の城主を弔っていたが、病むものは癒え、盲いたるは明を得、霊験あらたかなるままに、遠近風を聞いて参詣する者跡をたたず、いつしかお頭大明神として信仰される様になった。

盲僧が琵琶を弾いて地神経を誦するのが宝泉寺のしきたりで、幾人かの盲僧が次々と法燈をうけついだ。しかし栄枯盛衰は人の世のさだめ、宝泉寺に於いても住持が絶えたり、寺が荒廃したりしたこともあったが、惟治の墓は守りつづけられて今日に及んだ。今も住持はいないが、瀬口の老人クラブの人々が管理して、数年前立派な廟を新築して、神威をますますにあらたかにしている。

今回の例祭には、特に延岡市浄満寺の和尚をむかえ、古式にのっとり琵琶を弾じ地神経を誦して供養が行なわれた。どこも人手不足であるが、仏教界もその例にもれず、廃寺はあっても住持の居ない状態である。琵琶を弾じて地神経を誦ずる僧など、希有な存在であるが、今回の例祭に浄満寺住職を迎え得たことは幸であった。私も墓前に坐して冥福を祈ったが、地神経を聴くのは初めてなので興味深く聴聞した。

地神経は、日本全国の著名な神社について、社名と祭神を述べ立てるので、記憶するのが大変だろうと思った。兎も角琵琶と経文がよくマッチして、哀調切々、悲劇の城主を弔うのによく一致した雰囲気であった。此の例祭の途中でも賽銭を投じて参拝する外来の人が跡をたたず、お頭様が如何に庶民に信仰されているかがうかがわれた。

終って席を改め、近くの児童館で直会（なおらい）が持たれた。その席では

老人クラブ会長の挨拶

北川町長の祝辞

佐伯史談会長の祝辞

地神経の読誦

余興―土々呂婦人団の舞踊

等があって、和気あいあいの内に時が移った。私も指名されるままに祝辞をのべたが、それは次の様なものであった。

佐伯惟治を祀った神社は、佐伯地方に十社、守目郷に五社、日向北部に六社あるが、何れも怨霊神としての性格が顕著である。然るにお頭様（御頭神社）はこれと異って、庶民の願いを分かつ慈悲深い神となっている。この神威ますます高くする様に瀬口の老人クラブの方々は、一層お頭様のお守りを努めて戴いて。皆さんがお頭様のお守りをして下さることは、惟治を追慕する我々佐伯史談会員として感謝にたえない所である。

瀬口の老人クラブの方々が、お頭様を中心によくまとまって動いているのは他に例のない事実である。毎日会員が三々五々参集してお頭様は老人の集会所の観があるという。参道の拡幅や舗装、境内の拡張整備と、その計画完成のあかつきには更に面目を一新することであろう。

このお頭様のお祭を中心に、瀬口の老人クラブと北川町（中井町長）とわが史談会の間に、パイプの通じていることが嬉しい。これは悲運の城主を追慕する気持が基調となって実現したことであるが、こうした追慕の情が実は我々の郷土史研究の、一つの原動力となっているのである。

（おわり）